

第 4 回 栗東市農業振興基本計画等策定委員会 議事要旨

日 時	令和 3 年 10 月 1 日（金）14:00～16:20	
場 所	栗東市役所危機管理センター 3 階 大研修室	
出席者	【委員】	香川文庸委員（委員長）、川嶋忠良委員（副委員長）、 武村秀夫委員、中井栄夫委員、猪飼正道委員、竹村明委員、 駒井三郎委員、田中康人委員、奥村貞義委員、中井あけみ委員、 林優里委員
	【オブザーバー】	滋賀県大津・南部農業農村振興事務所
	【事務局】	栗東市産業経済部農林課 株式会社パスコ
欠席者	【委員】	谷口敏彦委員
次 第	1. 開会 2. あいさつ 3. 報告事項 (1) 地域説明会の実施について（結果） (2) 持続可能な農業経営規模について 4. 協議事項 (1) 栗東市農業振興基本計画（素案）について 5. その他 (1) 次回の開催日程について (2) 連絡事項 6. 閉会	

1. 開会

2. あいさつ

- ・事務局によるあいさつを行った。

3. 報告事項

- (1) 地域説明会の実施について
 - ・事務局より資料の説明を行った。
- (2) 持続可能な農業経営規模について
 - ・事務局より資料の説明を行った。

4. 協議事項

- (1) 栗東市農業振興基本計画（素案）について
 - ・以下、主な意見。

■ 1. 健康・安心ブランド『(仮称) 栗東のめぐみ農作物』促進プロジェクト

(イチジクの生産について)

委員：「栗東いちじくは」、毎年品評会でも高い評価を得ているが、単価的には上がっておらず、イチジクだけで生計を立てるのは難しい。別の作物と組み合わせた生産体制が必要。

委員長：組み合わせる作物として何が考えられるか。

委員：稲作とは収穫時期が重なるので避けたほうがよい。

委員長：イチジクの生産者数・生産量の増加の狙いとしては、すでに他の作物を生産している農家がイチジク生産に転換することを考えているのか。それとも新規で参入してきた人にイチジク生産を担っていただくことを考えているのか。

事務局：農業だけで生計を立てていくことが難しいという現状の中で、+αとしてイチジクの実産が提案できないか。栗東の農業振興の起爆剤として栗東いちじくに着目して頂けないかという考え。

(栗東いちじくの実産者支援について)

委員：現在 14 戸の農家がイチジクの実産をされており、実際に成功している方から経営方法や抱えている問題等、話を聞き共有してはどうか。

委員長：実際に話を聞くことで、イチジクに取り組む農家を新しく開拓するために必要な支援や、新規就農者が出てきた時の支援にも繋がると考える。

委員：基本方針等で、「稼げる農業」と掲げているが、取組として販路拡大や認知度等、消費者に対する働きかけが多いように思う。もう少し生産者に対する取組があればよいのではないか。

委員：イチジク組合員の高齢化が進む中で、新たにイチジク実産を始める方へ引退される方の設備を安く貸す等、初期投資を抑えることができるような支援はできないか。

委員：一人当たりの栽培面積には限界があり、生産量を増やすには面積を増やせばよいというものではなく、増やせばその分人材や人件費もかかってくる。需要が増え、価格が上がることで経営しやすくなると思う。

委員長：イチジクの実産者数・生産量を増やすと同時に販路や需要の拡大も考えなければならない。

委員：応援サポーターについて、消費者（情報発信）の立場だけでなく、農作業を手伝う等、生産者の応援隊の様な位置付けもできないか。

(栗東いちじくのブランド化について)

委員：イチジクをブランド化するのであれば、イチジクで生計が立てられるようにしなければならない。また、早朝の収穫や市場のセリに高品質のものを一定程度出すことができ初めてブランドとして価値が出ると思う。そのためには、ブランドとして維持するために確保すべき品質や年間の収穫量・出荷量、それに対する生産者の労働環境や利益等を考慮した上でブランド化を進めていくべきだと思う。

委員長：ブランドは産地と結びついており、産地となるとクオリティと量の確保が重要となる。経営設計や制度設計も含めて考えるべき部分がまだあると考える。

(『(仮称) 栗東のめぐみ農産物』制度について)

委員：『栗東のめぐみ農産物』制度については、「栗東いちじく」以外にも制度をつくっていくということだと思うが、認定数や認定基準はどのような形で考えているのか。

事務局：今後の検討ではあるが、「栗東いちじく」に対して認定基準を設けた場合、栗東市にとってイチジクに匹敵するような農作物が現れてくるようであれば「栗東いちじく」の認定基準等を活用、または参考としながら、新たに『栗東のめぐみ農産物』として認定・認証ができるような運用や制度設計を考えている。

委員長：「栗東いちじく」は栗東市の農産物をけん引するものだと捉えて、後に続くものがあれば、ブランドイメージをうまく使いながら多様な作物を推進していくべき。

事務局：目標値として設定はしていないが、イチジクに続く新しいブランドとして6次産業化の中でクリにも着目している。

■ 2. 栗東農業の次代を託す担い手支援強化プロジェクト

(担い手への支援について)

滋賀県：ワンストップ型育成システムやチャレンジ農業塾についてどのような部分の強化、拡充を考えているのか。

事務局：「栗東市チャレンジ農業塾協議会」は5つの組織（農協、県、市、農業振興会、農業委員会）で構成されており、現状、市に就農希望者が来た場合は、該当する組織に投げかける形でワンストップシステムが築かれている。これを投げかけだけで無く、明文化していけるようなシステムを構築できないかと考えている。

滋賀県：栗東市で就農したいと思えるメリット感のあるものにして頂きたい。

(農地について)

滋賀県：公共的な立場に近いJAが借り手の見つからない農地を一部借りるといったバックアップ体制は、JAレーク滋賀としては考えていないのか。

副委員：現在のところは計画が無い状況。栗東市での支援として機械作業を担い手農家をお願いしており、引き続き継続していきたい。

委員：優良農地であればいくらでも持続していけると思うが、優良農地でないところをどのように持続させるか。農地以外の多面的な機能を評価し、支援する必要があるのではないか。

(地域、集落について)

委員：集落での話し合いが無く、集落の農地は集落で守るという意識が薄れてきているように感じる。市として集落で話し合いができる場を設けてほしい。

委員長：人・農地プランの策定率は分かるか。また、集落での意見交換会のようなことを開催させるのは難しいか。

事務局：55集落のうちの19集落が人・農地プランの対象地域になっており、実質化できている集落は10集落、その他の集落にも働きかけている状況。現在はコロナ禍で難しいが、今後は集落内で話し合いを進めていただくことは可能と考えている。

委員長：集落の中から機運が高まらないという中で、行政がどこまで関与できるか難しいが、外からの働きかけが大切になってくる気がする。

委員長：集落に後継者がいない中で、農業に興味を持っている人や農村に魅力を感じる若い人もおられる。地域でそのような方々を受け入れる体制や土壌づくりが大切になってくる。

■ 3. 生産者と消費者をつなぐ農“縁”づくりプロジェクト

(都市と農業の関わりについて)

委員：年齢に関係なく、農業に従事している人たちとの交流の機会やきっかけがないと新しい人が入って行けないと思う。若い人と農業が交流する機会が必要なのではないか。

■ 4. 地域別構想について

(金勝地域について)

委員：農家もなぜ農業をするのか。行政も何のための農政なのか。今一度振り返ってほしい。

委員：農業がしやすい場所であれば担い手も増えると思う。新規就農者は農業をするつもりで滋賀県に来るが良い土地が中々ない。10年後、30年後に、地域を絞ってでも農業がしやすい場所がつくれたらと思う。

(葉山地域について)

委員：葉山地域は水はけも良く野菜、果物にとって一番よい土地。稲作が多く、野菜に適した土地が活かされていないように感じる。

委員：葉山地区の野洲川に近い砂地の土壌は、水はけがよいので稲作にも適している。しかし、土地改良の比率が少なく、小さい田をいくつか預かっても機械の導入や効率化のために中畦を取りたくても地権者が違う場合が多く難しい。そのような部分に関しても市のバックアップが欲しい。

(治田地域について)

委員：人・農地プランで位置付けた担い手でも、農地について十分な管理をして頂けていない状況が見られる。人・農地プランの担い手を含め地域農業のリーダーの育成が大切ではないか。

委員：どのような形で若い人に担ってもらえるかが重要。貸し農園をしている人もいるので、いろんな形で農地のマッチングの推進が必要ではないか。

(大宝地域について)

委員：現在は自分たちの土地は自分たちで守ることができているが、10年後は分からない。農地の3分の1は転作でローテーションをしているが、若手を育てていかなければとの思いから、若い人にも作業に入ってもらい育成に取り組んでいる。

委員：人・農地プランで中心となる担い手となっている。若い人も会社に行きながら協力はしてくれているが、土日しか作業ができず、できるだけ引き受けてくれないかと頼まれることが多い状況。また、10年先も農地として維持できるような土地改良をしてもらえる

と本腰を入れて農業ができるが、今のまま土地改良もしない状態であれば開発される可能性があるため、市街地周辺の農地について市として方向性をはっきりしてもらいたい。

(委員長まとめ)

委員長：各地域に関して、ミーティングを行い、ヒアリングの結果を反映した形でテーマ、目標項目、関連施策を示している。各地域において的外れなことはないと思うが、細かなところでお気づきの点があれば、事務局にご一報いただければと思う。

申し上げにくいですが、今後シビアに切るべきところは切り、大切にするとところを見極める形で、線引きをしなければならない場合もあるかと思われる。その代わり、区画整理という形での条件整備や話し合いの場を持てるような環境もつくって頂いた上で、農業をしている人たちが快適に農業をやっている環境をつくるのが大切だと思う。

計画ができて、計画に沿って行動する農業者や農業経営者がはねつけられることがあってはならないので、この計画に沿った実際のアクションプランの中で、どのような農業者支援を行っていくのか、今後詰めていく必要がある。

5. その他

(1) 次回開催日程について

- ・次回開催時期は11月を予定している。

6. 閉会